慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	前嶋信次氏提出學位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.4 (1954. 11) ,p.107(605)- 109(607)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19541100-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ら又公けにした。一九一九―一九二〇の兩年に又もや數々の論文が日本語で週刊誌、光明（Luz）に出現した。その編輯者は余であつた〃かかる事實は吾人に次の事を十二分に證明する。即ち、師の學生時代、並に司祭の品級を受ける以前の發表は少からずあり、且つその一切に就ては、師自ら吾人に教示する以外、知る由もないといふ事を。

フランシスコ會員
オドルフォ・シェーファー
アントリン・アバー
一九五一年三月二五日　ローマ

註

(*) アルチーボ・イベロ―アメリカーノ誌は、この傳記並に書誌的小論を以つて、ドロテオ・シリング神父の記念とし、又我が誌、我が祖國に寄せられた同神父の深い愛情に恭敬を捧げる次第である。なほシェーファー、アバー兩神父に、この勞作を當誌が版に附し得た事に就き、衷心より感謝する。

譯註

（一）ビブリオグラフィー　II　40參照

（二）P. Marcelo de Ribadeneira, O. F. M., Historia de las islas del archipielago Filipino y Reinos de la gran China, Tartaria, Cochinchine, Malaca, Siam, Cambodge y Japón. 一九四七年 P. Juan R. de Legísima, O. F. M. の編輯で Evangelización de Filipinas y del Japón と題されて公刊された。シリング神父編の書誌は四五頁にわたる大部のもので、卷頭に附せられてゐる。

（三）ビブリオグラフィー　II　50　51參照

（四）Duque de Sexto マドリッド市内の一地名、フランシスコ會の修道院がある。

（五）原文には un poco retórico とある。シリング神父の言葉である〃騎士的〃 caballerosa を指してゐる。現代ではこのやうな古めかしい武張つた語を使はないのに、わざ〳〵使つたのでスペイン人の自尊心の滿足があつたのだらう。

文中のカッコ（　）は原文にあるもの。「　」と註番號は譯者の附したもの。

筆者 Odulfo Schäfer と Antolin Abad 兩神父に就いてはよく識らない。御教示を賜はらば幸である。（岩谷十二郎）

前嶋信次氏提出學位請求論文審査要旨

主論文

東西交渉史上に於けるイスラム教徒勢力の消長に關する研究

本論文は二篇よりなり第一篇は「バグダードの文化とその滅亡」第二篇は「泉州の波斯人と蒲壽庚」についての研究である。其要旨は第一篇に於てはバグダード文化と其滅亡を、主として一二五八年に於ける蒙古軍のバグダード攻略と其イスラム文化に及ぼした影響を中心として論究したものである。アッバース王朝の首都として五百年間西アジアの中心をなしたバグダードの都が、フラグの率ゐる蒙古軍の爲滅亡した事件は東西文化史々上の顯著な出來事であるが、之に關する史料は、首都の破壞と共に亡失して甚だ乏しくなり、攻防戰に參加した諸民族の諸史料を集成してその經緯を明かにし、かつ其影響が那邊に及んだかを論證することは頗る困難であつて、從來我國史家の企圖しなかつた所である。しかるに著者は、綿密なる考證をすゝめ、先づアラビア首都の變遷を說き、バグダード建設の由來と規模とを述べ、ついて東城と西城との發達消長、政治變遷に就て語り、イスラム首府としてのバグダードの文化が如何に燦たる光を放つてゐたかを詳述し、蒙古軍來襲により潰滅し去つた大都府の往時の姿を再現せんと勉めてをる。ついでシナ、蒙古史料に現はれたバグダードの記事に就て考證し、殊に元朝秘史に見ゆるバグダードの產物名を逐一考證し、之に就て種々なる新しい見解を述べてをる。次いで蒙古軍來襲に關する各國の史料に就て述べ、此等に立脚してその攻略の經緯を述べてをる。即ち當時のカリフ、ムスタスィムが凡庸の君であり、バグダードの攻略は比較的容易であつたが、フラグはカリフの神性說にまどはされ、その進攻を躊躇したこと、然しイスラム內部にスンニー派とシーア派とが分裂し、カリフ政府を怨恨した者を生じてゐたことは、イスラム側の團結を妨げ、フラグにとり有利であつたこと、かくてフラグが、ナスイールッディーンの言に鼓舞され、バグダード攻略を開始するや六日に亘る激烈なる攻防戰の結果、城砦は陷落し五世紀に亙つて蓄積せられた膨大なる財物は、蒙古軍の掠奪に委ねられ、二百萬とも云はれる往民の大半は殺戮せられ去つたことを述べ、最後にアラビア、イラン兩民族は、アッバース王朝の初めより分離の傾向にあつたが、兩民族提携の楔であつたカリフ政權の崩壞によつてその分離に一層の拍車をかけられたこと、またカリフ政權に代るに蒙古民族が支配者となつたことは、ユーフラテス、テイグリス二河の中流以南の平野の荒廢を招き、經濟力中心が既にエジプトに移りつゝあつたことと相俟つて再びバグダードが昔日の盛觀を取戻すことが出來なかつたことを述べ、此首都の陷落がイスラム文化に取返し得ぬ大損失を及ぼしたことを論じてをる。

此事件に就て今日殘る各種の史料中、著者は、我國學者の利用すること少きイスラム諸文獻を涉獵したのみならず、また西歐學者にとつて利用困難なる東亞資料をよく檢討し、之によつて各種の

新しい見解を示してをる。例へばアル・バナーカティーの史書に見ゆるフラグ扈從の一人なるシナ人 Tou mi-tzeu の稱號 Shang Sang 又は Saen Seng を佛人ブロシェは、「聖僧」の意味で解したが、著者は、之を道士の稱號なる「先生」の對音であると斷じ、またカリフ・ムスタアスイムが酒をたしなまなかつたことを證する唯一の史料、常德の「西使記」の一節を檢討し、その愛飲した「橙漿」がシャーベットであることを考證したるが如き東西の史乘に通ずる著者にして始めてなし得る所である。

第二篇「泉州の波斯人と蒲壽庚」は、宋末元初に福建の泉州によつて活躍した蒲壽庚がアラビア人であると云ふ從來の學說を批判し、桑原隲藏博士の擧げる諸證、一、蒲と云ふ姓がアブーの對音で蒲壽庚は、アラビア人を指すと云ふこと、二、彼の祖は、もと占城より來たと云ふこと、三、彼の父は、もと廣州に住してゐたが、廣州の蒲姓の風俗は、イスラム教徒の習俗に類すると云ふことが、彼をアラビア人と推定すべき何等確實な根據ならざることを述べ、アブーの呼稱は、本來アラビア語であるが、イスラム教の發展と共に廣くイスラム教徒の間に弘まり、ペルシア人、トルコ人にも用ひられしこと、また廣州の蕃坊も種々の國籍の外人により構成せられ、占城のイスラム教徒のコロニーまた同樣であり、同地發見のイスラム碑文から見ても當時の居留民がアラビア人のみであつたと斷定出來ず、ペルシア人やトルコ人の在住も考へられ得るとし、更に泉州の地に有力なペルシア人の居留地があつたことをシナの史料や清淨寺に殘るイスラム碑銘、イブン・バットゥータの記事等によつて證據だててをる。卽ち我國の慶政上人が泉州より贈つた嘉定十年の所謂南蕃文書がペルシア文であるのを始めとし、ペルシアのスィーラーフ出身のシーラウィー家、シーラーズ出身のアハマット等宋から元にかけ泉州に在住してゐたイスラム教徒の大部分がペルシア人と思惟せられること、またペルシア、アルメニア人などのキリスト教徒の在住も證せられることを述べ、更に元末に於ける泉州の西域人の叛亂もペルシア人を主力とせるものたることを論じてをる。泉州の居留地が主にペルシア人によつて勢力を占められてをると云ふ性格から見ても、それを背景として興つた西域人蒲壽庚は、アラビア人とみるよりもペルシア人とした方が妥當性があると云ふのが著者の意見であり、アラビア人、ペルシア人共にイスラム教徒なるもアッバース王朝初期よりペルシア人獨立の傾向が强くなりイスラム文化の研究に兩者の區別を輕視することは錯誤であると結んでをる。

著者の立論によつて蒲壽庚のペルシア人なりと云ふことは決定的に證明せられた譯でないが、少くとも桑原博士のアラビア人說は根據薄弱であることは明確に論證せられてをる。兩篇を通じて著者はイスラム文化研究の最近に潮流に棹し、本邦東洋史家の手を染むること最も少き東西交涉史々上におけるイスラム教徒の勢

力消長の問題に就て興味ある研究成果を披瀝してをる。今日我國に於て世界史的史觀が要求せられてをるが、實際問題として中間にまたがる西亜の歴史研究に從事するもの、本邦に於て寥々たることは、西洋と東洋とをつなぐ綜合的史觀の樹立企圖を妨ぐること大なるものがある。本研究は、著者が多年に亙る研鑽の成果であつて、なほ今後の研究に俟つべき部分あるも、東西の文獻、殊にアラビア語の資料を驅使して試みたる著者の學殖と卓越せる獨自の見解は東西交渉史の研究の上に大いなる示唆と貢獻とを與ふるものがある。よつ著者は文學博士の稱號を受ける資格あるものと認める。

昭和二十八年九月三十日

主査委員

慶應義塾大學文學部教授　東洋史　民族學　擔當　ドクトル・エス・レットル　松本信廣

慶應義塾大學文學部講師　東洋史　擔當　文學博士　和田清

慶應義塾大學文學部教授　史學概論　史學史　西洋史　擔當　文學博士　間崎万里

彙報

昭和二十八度春期史學科見學旅行記

七月三日午前九時三十分、低い雲行を氣遣いながら、金澤文庫驛前に集合。伊木、淺子兩先生以下、江坂氏を加えて總參加者數三十二名。途中貝塚の所在などを語りつつ、急いで稱名寺山門を潜る。すぐ左手の白聖の建物が現在の金澤文庫である。析から關靖先生日本學士院賞受賞記念金澤文庫印展が催されており、正印第一類二種・第二類二種・第三類八種に分類され、僞印・模印等を展示していた。

關先生にはこの日態々お出でを戴き、當文庫について御説明の勞をとつて下さつた。卽ち、金澤文庫は北條義時の孫實時によつて創められ、その後顯時、貞顯（金澤氏を稱す）、貞將と四代に亘つて繼承され、藏書もいよいよ充實したのであつたが、元弘三年北條氏滅亡後は、文庫も次第に衰退して、藏書も少からず散佚したが、實時の遠慮から之を金澤のような幽靜の地に建てゝいたので、今日まで多くの珍籍を傳存することが出來たとその沿革を述べられ、更に稱名寺と傳えられた古書の紙背から約五千通を越える古文書が發見せられ、當文庫研究に新分野が開かれたことに言